

図書館

情報工学科4年 向 美紀

私が図書館に通いだしたのはいつの頃からだろう。小さい頃の図書館の思い出といえば毎週土曜日に母と姉と一緒に図書館に通い、よく絵本を読んでもらったり、自分で好きな本を探したりした。その当時は、一人五冊しか借りられなくていつもどれを借りるか迷っていた。「これもいい、あああれもいい」なんていって私だけ本を選ぶだけで一時間ぐらいかかり、結局、母や姉の分の借りることができる冊数までをも私が借りる始末。それでも満足しきれない私は図書館で借りることができなかった本をずっと粘って読んでいた。とにかく本が好きだった。そのときはまだ図書館で勉強している高校生や中学生を見ても自分には関係ないと思っていた。でも、もうその時から、一生懸命に机に向かって手を動かしている高校生や中学生の姿を見て何か憧れを感じていたのかもしれない。小学高学年になると、知らぬ間に図書館で皆と同じように机に向かっていた。そこでは、高校生や中学生、一般の人さまざまな人がさまざまな目的を持って勉強していた。その中に、ぽつんとひときわ小さい子がいた。そう私である。たいした勉強でもないのに、なぜかやる気が出て、学校で宿題として出たワークを一日に何ページもしたりした。宿題が終わって時間が余れば宿題以外のページもした。それをしているときの気持ちよさ。なんだか自分だけが偉くなったような気がして誇らしげな気分と、今日もたくさん勉強をやったぞっていう満足感に浸されていた。そういえば、中学生の頃一番図書館に通ったかもしれない。受験生のときの長期休みのときは必ず開館から閉館まで図書館にいた。図書館の環境が好きだった。みんな目的はばらばらだけど一生懸命何かに集中してやっている。そんな図書館が好きだった。

だが、高専に入って図書館に行く回数が少しずつ減っていった。もちろん学校の図書館には行っていたがいつも私が通っている図書館には行かなくなった。なぜだろう。あんなに好きだった図書館。気がつけば図書館に通っているときはいつも目的があった。何かを頑張る！やり遂げるぞって言う強い意志があった。今、私の中でそれが薄れているのかもしれない。そう思った。正直、この電書波図の話が来たとき何を書こうか迷っていた。私なんか書いていいのだろうかという気持ちで一杯だったからだ。そこで図書館について考えてみた。振り返ってみると、いつも図書館があってそして自分という人間がいた。大きな夢を抱き、それを叶えるために、図書館に行っていた。そして目的は違うが一生懸命に何かに向かってがんばっている誰かがいつもそこにいたこと。そんな環境だからこそ自分にあっている場だと思ったこと。だから図書館が好きになれたということ、そして図書館に向かうときの自分は何よりも楽しそうでそんな自分が好きになれたということ。

気がつけば、私は今年で二十歳になる。進路も決め地に足をつけなくてはならない。だが、人生うまくいかないことのほうが多い。幼いときと比べ人間関係も勉強も複雑になり嫌なことのほうが多い。口では何でも簡単に言えるけど実際は本当に難しい。そんな時、図書館に行こうと思う。そして、また力をもらって頑張ろうと思う。

図書館、それは私にとって人生のターニングポイントとなる場なのだ。